

心にとどく“校長講話”に関する一考察：「校長アンケート調査」（公立小学校60校）を基にした分析を中心に

著者	原之園 哲哉
雑誌名	鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要
巻	28
ページ	161-170
発行年	2019-03-29
URL	http://hdl.handle.net/10232/00030575

心にとどく“校長講話”に関する一考察

—「校長アンケート調査」(公立小学校60校)を基にした分析を中心に—

原之園 哲哉 [鹿児島大学教育学系(教職大学院)]

Considerations on how a "speech by the school principal" can touch the students' hearts: Focusing on an analysis based on a "Questionnaire Survey on School Principals"

HARANOSONO Tetsuya

キーワード：経験則、発達段階、評価、系統性、共有化

1. はじめに

本稿は、小学校・中学校・高等学校・特別支援学校等の校長が、日々、目の前に横たわっている課題として、おそらく最も頭を悩ませている「校長講話」の実態や実情について分析・考察し、「心にとどく“校長講話”」のあり方に言及することを目的とする。

学校現場には、日常的に解決が求められる様々な課題や突発的な問題が山積している。例えば、学力向上、キャリア教育等の学習・進路指導、いじめ防止、不登校生対応、事故や苦情対応等の生徒指導、保護者や地域関係者との対応、さらには、職員の指導や人事評価等々、校長の適切な判断や指導が必要な課題は数多い。

しかしながら、多くの課題解決に当たっては、職員やPTA・地域関係者との協力や協働、また事案によっては教育委員会との連携が不可欠である。言い換えれば、校長一人だけで対応しなければならないわけではない。むしろ、多くの職員や関係者との協議・協力が必要である。

その観点から言えば、「校長講話」は受け手として児童生徒及び職員、さらには保護者等々が存在するが、話し手・送り手としては校長単独の行為であり、いわば孤立無援の状況であろう。また、これまで「校長講話」を大学等々で学んだという校長に出会ったことはない。校長個々が長い教職生活の中で体験的に修得してきた経験則に基づく、あくまでも個人的な「講話術」である場合が多いのではなからうか。そういう中で、校長講話は厳しい評価対象の一つとなっているのではないか。

実態として特に懇意にしている校長同士では、学習指導、生徒指導等の対応のあり方に苦悩する喫緊の課題と同等に、いやそれ以上に「校長講話」の難しさが語られることが多い。しかしながら現実には、校長研修会等で「校長講話」がテーマとして取り上げられたという話はほとんど聞かない。もちろん、講話集や教育雑誌等には模範的な講話事例を掲載してあるものもあるが、学校現場で日々の「校長講話」に有効に活用できたという話もあり聞かない。

このように、校長にとっては極めて切実な課題である「校長講話」がなぜ真正面から取り上げられないのか、あるいは避けられてきているのか。その要因は何であるのかを言及したい。また、そもそもその「校長講話」の実態はどのようになっているのかを調査・分析したい。

さらには、児童生徒、職員、保護者等の「心にとどく“校長講話”」のあり方に少しでも近づきたいと切望している。今回は、特に講話の対象となる、聞き手の年齢に幅がある小学校の「校長講話」

を研究の対象、分析・考察の対象とした。

2. 研究手法

まずは、小学校の「校長講話」がどのように行われているのか、その実態を確認するために、実際に小学校を訪問して「全校朝会（朝礼）」や終業式を見学した。

これまで、高校の校長や主に小中学校を管轄する教育事務所長、県教育委員会の指導系や管理系の様々な部署を経験してきた中で、学校の創立記念式典、授業や研修会等には積極的に数多く参加してきたが、小学校は言うまでもなく、他校あるいは他校種の全校朝会や始業式等々については、寡聞にして実態を正確には把握しておらず、事実、実際に目にする事はなかった。

今回、実際に見学しての率直な感想としては、その詳細等については後述することとするが、予想していたものとはかなり異なり、驚きと感動とともに校長さん方の日頃のご努力に敬服するばかりであった。なお、予想していた「校長講話」は、小中高校時代に経験したものを前提としていことから予断を持ちすぎていたためか、大きな温度差、へだたりを改めて感じざるを得なかった。

次に、A市の小学校長会の理解、協力を得て、A市の小学校の校長を対象に「校長講話」に関するアンケート調査表3を実施した。回答期間は10日程の期間であったが、A市の60校の校長から回答が得られた。校長講話については、日ごろから相当に苦慮されているのか、アンケート項目の回答とは別に、講話を実施するにあたっての工夫や苦勞、意義等について記載されている方もみられた。そのような中から10校の校長からは直接、聞き取り調査も行った。

以上、学校現場の実態調査を基に「校長講話」のあり方について分析・考察を試みた。なお、調査に先立って行った、小学校の学校現場を訪問しての見学で得た実感は、まさに「アンケート調査」「聞き取り調査」を実証し裏付けるものであった。

2.1 「アンケート調査」の具体（鹿児島県A市立小学校60校の校長にメールでのアンケート調査）

2.1.1 「アンケート調査」実施期間及び方法

- ・期間 2018年7月30日から同8月10日まで。
- ・方法 各学校の校長アドレスに調査ファイルを送信し回答（返信）してもらった。

2.1.2 学校規模（児童数・教職員数）

表1

児童数	～1001	～801	～601	～401	～201	～101	～81	～61	60～
学校数	4	5	10	16	12	2	2	4	5

表2

職員数	～51	～41	～31	～21	～11	10～
学校数	4	5	11	21	11	8

表1（児童数）、2（教員数）が示すように校長の在籍する小学校60校は、児童数1400人余、職員数70人余の大規模校から児童・職員ともに10人以下の極小規模校にわたり、鹿児島県の標準的

な学校モデルケースである。回答校の中には、小中併設校、複式学級なども含まれている。

なお、60校の校長は、数名の新人校長を除いて複数の学校で校長経験のある、いわゆるベテラン校長であり、「校長講話」については多くの経験と実績を持つ方々である。

2.1.3 アンケート調査項目（アンケート用紙から）

表 3

1	各学年の児童数は？	1年（ ）人………6年（ ）人	総児童数（ ）人
2	学級数・職員数は？	（ ）学級	（ ）人
3	全児童数を対象とした年間の「校長講話」の回数は？	約（ ）回	
4	講話の時間は？	約（ ）分	5 講話をする主な場所は？（ ）
6	講話の主な内容は？	（ ）	
7	講話で工夫していること？	例：プレゼン。音楽。紙芝居。実物。等々の活用 （ ）	
8	講話の方法は？	例：原稿を読む。原稿を見ないで話す。思いついたことを話す。等々。 （ ）	
9	講話をつくる上で参考にしているものは？	（ ）	
10	講話の仕方・方法は誰から、あるいは何から会得されたか？	（ ）	
11	講話で苦慮されていることは？	ア 時間が短い イ 話題探し ウ 講話対象の幅が大きい エ 特にない ※その他（ ）	
12	「校長講話」について思っておられることを自由にお書きください。	（ ）	

2.1.4 校長への聞き取り（10校）の主な内容

- 1 「校長講話」は校長の業務でどれほどの割合を占めているか？
- 2 「校長講話」の意義についてはどのように考えるか？
- 3 「校長講話」に先輩校長等はどのような影響を与えたか？
- 4 コンピュータ等を駆使し、視覚・聴覚に訴える手法をどう考えるか？
- 5 「校長講話」の改善や今後の展望についてどのように考えるか？

3. 分析と考察

3.1 「校長講話」（B小学校1学期終業式）の実際

当該校の校長によれば、入学式と卒業式は「式辞」ということもあり、また保護者や地域の方々等も出席することもあり、幾分、普段の「校長講話」とは異なるが、全校朝会、始業式、終業式は講話時間も含めてほぼ同じような進め方・内容であるということであった。つまり、「校長講話」そのものは通常のものであり、特別なものではないということであった。むしろ、普段の全校朝会などでは自作のペープサート（紙人形劇）や自筆（毛筆）のキーワードパネル等を多用することであった。当該校長は、これまで実際に自作・自筆された「校長講話」の教材を示された。

なお、当日、校長は、プロジェクターを活用して壇上のスクリーンに絵や文字等を映しながら、身振り手振りを加えながら情感を込めて講話を進められた。

3.1.1 学校規模等

各学年3～4学級、特別支援学級5、児童総数700人余、教職員30人余の当該地域においては規模の大きい小学校の一つであるが、児童は多様性に富む小学校としては標準的な学校である。また、学校は地域の評価も高く、歴史と伝統のある落ち着いた雰囲気をも持つ小学校である。

3.1.2 「校長講話」の日程

表4

○日程 (式次第) 2018年7月20日(金)8:30～9:10 (「校長講話」15分) ※於: 体育館	
1 一同礼	5 校歌斉唱
2 開式のことば	6 閉式のことば
3 児童代表のことば (1年女子 4年男子)	7 一同礼
4 校長先生のお話	8 夏休みの注意 表彰

校長によれば、当該地域小学校の終業式の式次第(表4)としては、標準的な一般的なものであるとのことであった。特に、1、2年生のいわゆる低学年の発達段階等を考慮すれば、校長講話の時間は長くとも10分から15分程度が適当であるとの見解であった。なお、近年は、気温・湿度等の状況から児童の健康状態を考慮して空調設備のない体育館を避けて、各教室に備えられているディスプレイ(校内テレビ放送)等を活用する場合もあるということであった。

なお、当日は気温・湿度等が児童の健康に大きく影響を与えるような状況ではなかった。通常どおり児童は床に腰を下ろして校長の話を聞いていた。なお、職員は立って児童を見守っていた。

3.1.3 「校長講話」の要旨(内容)

終業式での校長講話は、俳優・演出家・絵本作家でもあった故米倉齊加年氏の絵本「おとなになれなかった弟たちに…」を用いて、生命の大切さ、平和の意義などを感動的に訴えながら理解させるものであった。なお、この絵本は評価も高く学校現場で広く活用されているとのことであった。

○講話の大きな流れは、概ね下記のようなものであった。(校長は壇上から降りて講話した)

表5

- ・スクリーンに「○月△日」を大きく映し出し、何の日なのかと児童に投げかけた。
- ・児童はすぐさま、手を上げながら大きな声で「小学校の創立記念日」と口々に答えた。
- ・校長は「よく覚えているね」と賞賛し、そしてこれまでの卒業生の総数などを示した。
- ・児童は褒められたことで活気が出たのか、その卒業生の人数の多さに強い関心を示した。
- ・校長は同日が「鹿児島大空襲」で多くの人が犠牲になった日でもあることも紹介した。
- ・さらに、夏休み中に迎える終戦記念日のこと、そして生命、平和の大切さ等を説明した。
- ・壇上のスクリーンに絵本「おとなになれなかった弟たちに…」(米倉齊加年作)を映した。
- ・さらに、戦時中の時代背景を説明しながら、赤ちゃんを背負った少年の絵を映し出した。
- ・校長は絵本の内容を身振り手振りも加えながら、丁寧にわかりやすく情感を込めて語った。
- ・校長は絵本を手にしてはいたが、児童に視線を配り読んでいるような感じではなかった。
- ・多くの児童が感動したのか涙していた。多くの職員も感じ入っているようであった。
- ・校長は朗読終了後、生命はかけがえのないこと。平和の大切さなどを改めて語った。

当日の終業式の「校長講話」（表5）は予想していたものとはかなり違うものであった。しかし、校長に終業式の見学をお願いしたのは、前日であったこともあり、見学者があるということで特別に用意したものではなく、通常の「校長講話」であったということである。

a 「校長講話」の特徴

講話の内容そのものは、生命というものがかけがえのないものであることなどを絵本を用いて理解させ受容させる教育的なものであり、いわゆる平和教育をその趣旨とするものであった。

校長は壇上から降りて児童のそばに近寄りながら、スクリーンを効果的に活用し、学校の創立記念日、鹿児島市大空襲日のこと等の身近なことを取り上げつつ、何気なく、学校や地元地域ことなどを織り込みながら、児童や職員が自然にそのことに興味関心を抱くように、巧みに演出しながら話の中に溶け込ませていくもの（表5）であった。話の内容は相当に創意工夫されており、効果的なものであった。

b 「校長講話」の評価

講話の意図することの伝え方、話し方はまったく指導的、教訓的なものではなく、児童さらには職員の心に迫る、いわゆる「心にとどく」あるいはとどげようと意図するものであった。校長の意図は一定程度達成されており、事実、多くの児童、職員が感銘・感動していた。

当初、予想していたいわゆる紋切り型の教訓的なものではなく、聞き手の児童の心に訴えながらも職員にも好印象を与えるものであった（表5）。ここまで創意工夫されていることにある種の驚きを感じた。

c 校長自身の評価

「自己採点すると70点ぐらいか。児童はいつものことであるが、今回も静かに聞いてくれた」と終業式後に控えめに自己評価した。準備には構想も含め1ヶ月程は要したということであった。

さらに校長は、「若いときから大切にしてきたテーマなので、自然と気持ちが入った。そのことが伝わったのではなかろうか。自分自身が熱く思っていることは伝わるのではないかと思う。いや、日々、児童の心にとどくよう工夫しなければならないと考えている」と自己評価された。

校長は自己評価に加えて、講話の対象が1年生から6年生と幅が大きく、心身ともに発達段階が異なることから、日ごろからどのようにして、児童の心に響くように話が出来るか苦慮している。また、どの校長も同じであろうが、職員、そして児童の背後にいる保護者にどのように伝えるか、伝わるかに腐心している。特に、職員は校長講話の中身、そして児童への伝え方で校長を自分がそうであったように厳しく評価していると感じている。講話が児童、職員の心にとどいた時には、全校朝会の後に、それぞれのクラスで講話について話し合っているようである。その時の児童の反応を職員は報告してくれるが、これが次回の講話の励みでもあり、戒めでもあるとのことであった。

当該校長は、極めて真摯に「校長講話」に取り組んでいる模範的な校長の一人であろうが、今回のアンケート、聞き取り調査等から浮かび上がるのは、どの校長も程度の差は幾分あるものの、児童、職員、保護者の受け取り方や反応に敏感であり、「校長講話」は心を悩ませている極めて切実な課題である。また、話題が校長自身の体験や経験則に基づきすぎているきらいもやや感じられた。

3.2 「校長講話」アンケート調査の分析と考察

3.2.1 アンケート調査の結果

表 6

1	各学年の児童数は？ (前掲)	2	学級数・職員数は？ (前掲)					
3	全児童数を対象とした年間の「校長講話」の回数は？ <u>合計 60 校</u> <u>平均回数 17.9 回</u>							
	回数	～10	～15	～20	～25	～30	～35	36～
	学校数	5	19	29	0	5	1	1
4	講話の時間は？							
	<u>合計 60 校</u> <u>平均時間 10.6 分</u>							
	時間(分)	～5	～10	～15	16～			
	学校数	8	37	14	1			
5	講話をする主な場所は？							
	回答 (ほとんど体育館であるが、天候等によっては校内テレビ放送活用。多目的室。)							
6	講話の主な内容は？ 回答 (時事話題、学校目標、道徳的課題、安全・健康、生活指導、学習指導、趣味。等々)							
7	講話で工夫していること？ 回答 (視覚・聴覚に訴えるもの、プレゼン、具体的な事物、紙芝居、キーワード紙。等々)							
	※ <u>教具的なものをまったく何も使わない学校9校、ただ、分かり易く語るよう配慮</u> と回答。							
8	講話の方法は？ 回答 (原稿を作成する全60校、原稿を読み上げる17校、原稿を見ないで話す43校)							
9	講話をつくる上で参考にしているものは？							
	回答 (新聞、TV、書籍、地域の話題、経験則、児童・職員の情報、学校の目標。等々)							
10	講話の仕方・方法は誰から、あるいは何から会得されたか？							
	回答 (先輩校長、教育委員会等の講演、TED、書籍、独自に修得、経験則。)							
	※ <u>「独自」が31校。約半数が誰からも学んでいない。自分流をつくる努力が必要</u> と回答。							
11	講話で苦慮されていることは？							
	苦慮等	時間が短い	話題探し	話す対象の幅	特にない			
	学校数 (複数回答)	11	25	27	5			
12	「校長講話」について思っておられることを自由にお書きください。							
	<ul style="list-style-type: none"> ・直接、児童に話すことが出来る貴重な機会なので、系統性を持って話題を提供すべき。 ・話す相手は、児童だけではなく、結果として職員保護者にも話すことになる貴重な時間だ。 ・「校長講話」を意識することで、人との出会いや日ごろの読書などが面白くなった。 ・「校長講話」はこれまでの長くてつまらないものだという固定概念を打破したい。 ・校長としての自負心から少しでも子どもたちの心に残るような話がしたいが、難しい。 ・校長経験が長くなると、話題もマンネリ化する傾向があるので、気をつけたい。 ・校長職の業務ではなかなかレベルが高く難しいものの一つだと実感している。 ・どうしたら、心に響くような話が出るのか、創意工夫しているが、悩みは深い。 ・講話の方法なども校長とはいえどもプライド等を捨てて学び続けることが必要だ。等々。 							

3.2.2 アンケート調査の分析と考察

まず言えることは、「校長講話」の占める平均時間は、 $17.9 \text{ 回} \times 10.6 \text{ 分} = 189.7 \text{ 分}$ であり、年間

を合計してもわずかに約 3.2 時間程に過ぎない（表 6 項目 3、4）。年間の勤務時間からすると、構想、準備に係る時間を除くと実際に目に見える講話している時間の割合は極めて小さい。

しかしながら、業務時間の割合の小ささ比して、その心的な負担はかなり大きな割合を占めていることがアンケートの結果からも明らかである（表 6 項目 11、12）。多くの校長は、「校長講話」の性格上、プライドもあり職員に相談することもできない、いわば孤立無援の状況の中で、児童や教員、そして保護者の心にとどく話をしようと個々、もがきながら創意工夫、腐心している（表 6 項目 7、8）。その取り組む姿勢はたいへん真摯なものであり、切実なものであることが判明した。

一方校長は、表 6 項目 9、10 の回答にあるように、「校長講話」の重要性、意義を十分かつ切実に認識しているわりには、話題の設定の方法、講話の手法、あり方等について系統的に学習したことはなく、まさに手探り状態であることが見えてきた。教員に対する各教育委員会や大学等が進めている学習指導法改善等のシステム化されている手厚い取り組みに比して、「校長講話」に対する取り組み方は校長自身の裁量や考え方に委ねられ任されている印象が強い。言い換えれば、まだ相当に改善の余地があり、かなり手薄であるとも言えよう。

このことは、小学校の校長だけにかぎらず、学校現場の最高位に位置する校長職に内在する切実な課題と言えよう。換言すれば、研修体制そのものについてはたしかに法的な制約もあるが、主に教員だけを対象としている研修体制等の制度的な課題とも言えよう。もちろん、この課題の解決のため、各方面から研修会等を通じてさまざまな施策や方策を講じようとする動きは見られるが、まだ十分とは言えないのではないだろうか。

3.3 校長への聞き取りの分析と考察

3.3.1 「聞き取り」の結果

表 7

1 「校長講話」は校長の業務でどれほどの割合を占めているか？	主な回答（講話そのものの時間は短いですが、話題探しなど準備にはかなりの時間を労しているかなり心的負担やストレスが大きいです。）
2 「校長講話」の意義についてはどのように考えるか？	主な回答（直接、子どもたちに話せる貴重なもの。間接的な職員指導の時間でもあり重要。校長が積極的に情報発信していくという点でも重要だ。）
3 「校長講話」に先輩校長等はどのような影響を与えたか？	主な回答（自分流のスタイルをつくるべきだ。参考になる先輩もいるが、先輩の頃とは、今の時代や状況が異なるのであまり参考にならない。）
4 コンピュータ等を駆使し、視覚・聴覚に訴える手法をどう考えるか？	主な回答（これからは不可欠だが中身が大事であり、かたちだけでは惹きつけられない。）
5 「校長講話」の改善や今後の展望についてどのように考えるか？	主な回答（校内 TV 等の新システムの導入。講話のマニュアルも必要。校長自身の研鑽の場だ。 「校長講話」の趣旨をまずは職員に周知し、理解させることが必要なので、事前にプリントなどで周知と理解を図るべき。学校全体の認識の共有化を進めるべき。）

3.3.2 「聞き取り」の分析・考察

今回の研究の中で、「校長講話」を直接見学することで受けた当初の印象、簡潔に言うと校長の講話に対する真摯に取り組む、熱意と意欲的な姿勢に強い印象を、「アンケート調査」(表6)と「聞き取り」(表7)はまさに裏付けるものであった。

「聞き取り」表7項目1、2にあるように、校長は「校長講話」が校長職の業務の中でも、講話時間そのものは短いとはいえ、大きな割合を占めるものだと実感しており、その意義や重要性を強く認識していることが分かった。また、直接児童に話ることができる唯一貴重な機会だと認識しながらも、その児童の背後に職員、保護者の視線あるいは評価を強く意識していることも分かった。

このためか校長の中には、学校のホームページやブログに講話の口述原稿そのものを掲載している方も何人かいた。さらには、講話の趣旨を児童に周知徹底するため、事前に講話の内容を職員にプリントして配布されている方もいた。担任が学級活動でも活用しているとのことであった。

この積極的な周知活動の要因の一つには、児童の指導に生かしたいという思いの外に、近年の人事評価制度の導入も影響しているのではないかと推察される。もちろん、これにより「校長講話」が改善する方向に進むのであれば、人事評価は効果的な影響を与えていると評価できる。

表7項目3についてであるが、「アンケート調査」でも同じような結果となったが、校長は講話の手法とでもいべきものを先輩校長等からはほとんど学んでいない。しかし、体験的に無意識のうちに学んでいるのかもしれないが、学んだことを認めていない。多くの校長は、長い教員経験の中で自ら修得してきた、いわば経験則によって講話の手法を会得したと認識している。

このことは、常に業務改善や学校の特色化が求められている、いわば校長職の特性とでも言うべきものかもしれないが、これでは、ある時ある学校に秀逸な講話をする校長が存在していても、その講話の手法はその校長かぎりですべて終わってしまい、後の校長に伝わっていかないのでなかろうか。あるいは、深まっていけないという問題もあると懸念する。

表7項目4についてであるが、講話の補助手段として、児童の理解を補助、促進するために視覚や聴覚に訴える、コンピュータソフトを活用したプレゼンテーション等の教具的なものをかなり多用している校長が多い。近年、学校現場にもコンピュータをはじめ視聴覚機材が整備されてきたことも影響していると考えられる。また、特に小学校の場合は、講話の聞き手である児童の発達段階が小学校1年生から6年生と幅広いという特性もかなり影響しているのではないかと。

校長の多くは、これらの取り組みは相応の効果があると評価しているが、やはり大切なのは講話の中身であり、表層的な技法に流されるべきではないと認識している。さらには、講話は児童に、聞く姿勢、聞き取り、理解することの大切さを教える教育的な機会だと理解している校長も多い。

これらの真摯な姿勢は高く評価すべきことだと考えるが、表7項目5にもあるように、校内テレビ放送設備の活用等、児童の理解や健康を踏まえた新しい「校長講話」のあり方も検討すべき時期に来ているのではなかろうか。

4. おわりに

現在、「校長講話」でコンピュータネットワークを検索すると、特定の他都道府県のかなりの学校のホームページやブログが検出される。また、同時に相当数の「校長室だより」等も検出される。それも歴代の校長にわたり何年にもわたる大量の「校長講話」が検出される。特定の地域からの発信が多いのは、まだ十分には確認していないが、その地域の校長間の連携や教育委員会の指導等が影響しているのではないかと推測される。この点については、今後も調査を続けて解明していきたいと考えている。

現在、それほどに、校長は「校長講話」を真摯に、そして熱心に取り組んでおり、「校長講話」を通じて、学校の特色や魅力を児童やその保護者、地域関係者等に積極的に情報を発信しようとしている意思を強く感じる。しかしながら、そのような学校現場の潮流の中にあっても、「講話」そのものの研究や指導法、あるいはその伝授が十分に確立されているとは言い難いことが、今回のアンケート調査等で明らかになった。

以上の今回の調査に係る分析及び考察を踏まえて、「校長講話」の改善の視点として3点について提起したい。

① 年間計画の必要性

授業については、年間計画、学期ごとの計画、さらには日々の授業指導案を到達すべき目標を児童の実態等を勘案して最大の効果を上げられるよう検討してつくるのが一般的である。ところが、多くの校長は、できるだけ実態や時事に応じた講話にしようと、日々、話題探しを新聞等に求めるなど、手探りの状態であり、年間を見通した講話計画づくりの困難さを感じている実態がある。

年間計画をつくることにより、話題探しにも一定の方向性が見いだされる。また、講話の系統性、一貫性も生じるのではなかろうか。校長職は、1校につき、ほとんど3年から4年在職することから、年間計画をつくることにより講話のマネリ化も防ぐことができるのではないだろうか。

② 提供情報の共有化

「校長講話」は校長が直接、児童生徒、職員、保護者等に理想としている学校像や児童生徒のありよう等を表明できる場面でもあり、また児童にとっても、校長の話を直に聞くことができる貴重な機会である。そこで、明示される認識や情報は児童生徒等に大きな影響与えるものであり、また教育的な意味を持つものであると考える。

だが、現実には、担任教員や学年主任等が提供する情報との重複、あるいは矛盾、齟齬が生じることも多々あり、児童生徒に与える教育的効果や浸透力が十分とは言えない状況がある。このような事態を避け、あるいは、より教育的効果を高めるとともに、効果的な情報提供となるよう職員が連携して情報の共有化を図ることが必要であるのではなかろうか。

③ 「校長講話」の集積と深化

学校現場における「校長講話」の共有化の必要性とともに、在籍校の枠を越えた学校間、具体的には校長同士のさらなる緊密な連携が必要なのではなかろうか。もちろん、現在も地域や県内全体において校長会や校長研修会では様々な情報交換や連携が図られているが、今回の調査でも明らかになったように「校長講話」に係る資源の共有化はなかなか図られていないのが実態である。

校長同士がさらに情報交換や連携を深めることにより、「校長講話」の有意義なデータ集積が進む中でより一段と深化したものとなり、児童生徒に対する教育的効果が高まるのではないか。そのこ

とにより校長の誰もが願う「心にとどく“校長講話”」が恒常的に可能になるのではなかろうか。

以上、紙面の制約もあり、十分な言及ができなかったが、今後もさらに調査研究を進めていきたいと考えている。

参考文献

編集：寺崎千秋(2006)「校長力を高める101の心得と実践」教育開発研究所

吉田新一郎(2005)「校長先生という仕事」平凡社新書

D・カーネギー、訳：市野安雄(2000)「話し方入門」創元社

池上彰(2007)「伝える力」PHP ビジネス新書

編集：岩上薫(2005)「一日一話 学校講話実例365」教育開発研究所